



日本現代文學全集・講談社版

68

吉 野 季 集 青 小 林 秀 雄

編 集
伊 藤 整
龜 井 勝 一
中 村 光
平 野 夫
山 本 健 吉

日本現代文學全集

68

青野季吉・小林秀雄集

編集
伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙吉
山本 健吉



昭和37年12月10日 印刷
昭和37年12月19日 發行

定價 500圓

© KODANSHA 1962

著者
あお 青 小
の 野 林
すえ 季 吉
ひで 秀 雄

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3~19
電話東京(941) 3111(大代表)
振替東京 3930

印刷 製本 刷製
寫版 眞印 本
製 兩
背 革
表紙クロ 口繪用紙
本文用紙 函貼用紙
見返し用紙 扉用紙
大日本印刷株式會社
株式會社 興陽社
株式會社 大進堂
株式會社 岡山紙器所
株式會社 第一紙藝社
株式會社 石井
日本クロス工業株式會社
日本加工製紙株式會社
本州製紙株式會社
安倍川工業株式會社
三菱製紙株式會社
神崎製紙株式會社

落丁本・竊丁本はお取りかえいたします

青野季吉集 目次

筆 蹟

心靈の滅亡……………	七
文藝運動と勞働階級……………	九
藝術の革命と革命の藝術……………	三
解放戦と藝術運動……………	六
藝術でない藝術……………	三〇
「調べた」藝術……………	三
外在批評論……………	五
文藝批評の一發展型……………	五
外在批評への一寄與……………	七
根本的の不滿……………	三
現代文學の十大缺陷……………	三
目的意識論……………	六
自然生長と目的意識……………	六
同……………	六
再論……………	元

正宗氏の批評に答へ所懷を述べ……………	四
我々の文藝運動と政治運動……………	五
芥川龍之介論……………	五
芥川龍之介と新時代……………	五
芥川龍之介の死に關連して……………	六
日本プロレタリヤ藝術史論……………	六
現代文學者の階級的性質……………	七
片上伸論……………	八
政治的價值と藝術的價值の問題……………	八
平林初之輔論……………	九
「夜明け前」論……………	九
「第一部」を論ず……………	九
「完結」を論ず……………	一〇
行動精神論……………	二
能動的精神の擡頭について……………	二
行動主義の文學的實踐について……………	五
源氏物語の鑑賞……………	九
心靈の復活……………	四

「宇治十帖」觀抄	一七
散文精神の問題	一八
文學的人生論	一八
世界文學的な立場	一五
百萬人のそして唯一人の文學	一四
未完成自畫像	一五
文學者の責任について	一六
自由	一六
「民主主義文學」に望む	一七
酒をくみかはして	一七
「静かな行進」に思ふ	一七
冬木のごとく	一七
強まつてきた黒い流れ	一五
新中國雜感	一六
ソ連から歸つて	一六
トルストイの家	一八
小説斷想	一八
週刊誌時代と作家	一六

蓮如・「御文章」	一八
半久庵記	一八
私版日本ベンクラブ史	一九
虚實の床	一九
とはずがたり	一九
玉堂と明烏	一九
小説心輪 (抄)	二〇
作品解説	中村光夫 四四
青野季吉入門	小田切秀雄 四三
年譜	四三
参考文献	四六

小林秀雄集 目次

筆 蹟

様々なる意匠	三二七
志賀直哉	三三五
志賀直哉論	三三三
おふえりや遺文	三五一
Xへの手紙	三九〇
私小説論	二七〇
中原中也の思ひ出	二六四
満洲の印象	二六六
菊池寛論	一九七
菊池さんの思ひ出	三〇五
當 麻	三〇七
徒然草	三〇八
無常といふ事	三〇九
西 行	三二

實 朝	三二八
平家物語	三三九
モオツアルト	三三一
「罪と罰」について	三五四
蘇我馬子の墓	三三三
眞 贋	三九六
エヂプトにて	三九五
ピラミッド	三九七
良 心	三九七
歴 史	四〇一
見失はれた歴史	四〇五
言 葉	四〇九
平家物語	四二三
忠臣蔵	四二七
武士道	四二二
學 問	四二六
徂 徠	四三一
辨 名	四三六

考へるといふ事	四三
---------	----

作品解説	中村 光夫	四九
------	-------	----

小林秀雄入門	小田切秀雄	四六
--------	-------	----

年 譜		四九
-----	--	----

参考文献		四七
------	--	----

青野季吉集

おのれを空しくせよ
これおのれを矢ふには
非にが 全うする道か

昭和三十一年五月の朝

青野季子



心霊の滅亡

日本の文學界にも階級の分裂が始まつて、滅亡階級のバラサイト達は、ずるぶん筋の立たぬ、愚劣なことを言つてゐるやうだが、ここではそれを調べ上げてゐる譯にはゆかない。しかし彼等が最後の時になつて、どんな悲鳴を上げるか、何といつて吼え立てるかとは興味あることであるし、また知つておく必要がある。

「先驅者」や何かで誰でも知つてゐるドミトリ・メレヂュコフスキーは、祖國の無産階級革命の後、苦しい思ひをして祖國を逃げて今巴里にあるが、ウエルズがボルシェヴィスト統治について發表した論文に對して、昨年十月、公開狀を公にしてゐる。ウエルズの露國無産階級を認めたのに對する彼のいや味やあてこすりには私は餘り興味がない、それよりも、彼が祖國の新狀態をどう觀てゐるか、祖國の無産階級の歴史的努力にどれだけ理解があるか、そして彼がブルジョアの觀念にどんなに麻痺してゐるか（日本でも現在見るやうに）が、注意に値する。特に日本のブルジョア文壇が餘程早い頃から擡ぎ上げてゐるメレヂュコフスキーの事だけに、猶更さうである。

彼はウエルズに對する、いや味を並べた中に、「現在では獨り我々露國人に限らず、地上の全民衆が、ボルシェヴィキ賛成とボルシェヴィキ反對との二つの陣營に分れてゐる。そして君は前者に結付いた。……君がどんなにその中間に立つと主張したつて駄目だ。此の二つの陣營の間には、中間的位置の存在を許さない。ボルシェヴィ

キに反對しない者は、即ち賛成する者だ。」と言つてゐる。藝術家は階級の外にあり即ち藝術家は階級の支配を受けないなどと呑氣なことを論じてゐる連中のある中に、メレヂュコフスキーが階級戦に追ひ捲られてこの言葉を發することを餘儀なくされたのは痛快である。然し彼が、かう云つてウエルズを片附けて仕舞はうとしてゐるのは、反動革命の結末のために、右か左かと言はせやうがため、歐洲のブルジョア政府を後援と頼んで、反動革命者の人物試験によい方法である。「階級の外に在る」藝術家メレヂュコフスキーが、ブルジョア階級の反動革命の陣營のために、犬馬の勞を執つてゐるところが面白いではないか。

露西亞の現在の統治について、ウエルズが「現在では勞農政府より以外の政府は、露西亞にはあり得ない。」と言つてゐるのに對し、メレヂュコフスキーは言葉を荒ららげて、「凡ての子供はその母の手に抱かれてゐるといふわけはない。ゴリラに盜まれてその手に抱かれてゐることもあり得る。現在の露西亞はゴリラに抱かれてゐるのだ。君は二週間餘りしか露西亞に居ないから、母の顔とゴリラの顔の區別はつくまいが、自分は五十年露西亞にあたら、ハッキリその區別が付く。」と、彼らしい事を云つてゐる。彼はこの比喩でごまかしてゐるが、彼の所謂本統の母は誰かと考へて見ると、ツァー統治に後戻りすることでない以上は、メンシェヴィキの統治を指すものである。云ひ換へると、彼の云ふことはかうなる。現在の露國のブルジョアはプロレタリアといふゴリラの手に抱かれてゐるから、これを取戻して、やはりブルジョアといふ母の手におかなければならない。自分は五十年露國のブルジョアであつたから、ブルジョアの顔とプロレタリアの顔の區別が付くと。これを更に言ひ換へると、現在その母の手に抱かれてゐる露國のプロレタリアを、母の手から盗んで來て、ブルジョアといふゴリラの手に置かなければならぬといふことになる。ブルジョアから見れば、プロレタリア獨裁は母の手ではない如く、プロレタリアから見れば、ブルジョア支配は

母の手でも無ければ神の手でもない。メレヂュコフスキーが如何に自國の無産階級の存在とその運動と意義に無理解で、ブルジョア萬能の階級意識に囚はれてゐるかが分る。

彼の言ふ所に依ると、或人が多數の泥棒に攫まつた。泥棒はその男の衣類を剥いで叩きのめし、半死半生にしておいて逃走した。そこへ僧侶と祭司が来て、この男はかう云ふ目に逢ふ運命にあつたのだと決めて仕舞つた。今の露西亞國民に今の政府より外にあり得ないといふのは、その僧侶と祭司のいふことと同じだといふ。ここでも彼は比喩でごまかして、露國の無産階級が露國の有産階級を仆し、即ちマルクスの所謂「收奪者を收奪した」のだといふ事實を正面から見て行かない。正面から見てその歴史的意義を究めることをしない。彼の論理で行くと、無産階級はブルジョアに向つて泥棒した。ブルジョア階級は封建諸侯に向つて泥棒した。科學は神に向つて泥棒した。ヘレニズムはヘブライズムに向つて泥棒したといふことになり、彼は「神々の死」を改作して「神々の盜難」を書かなければなるまい、歴史の進行に肉眼を閉ぢた者でなければ、承認出来ぬことである。

メレヂュコフスキーは、上品なブルジョア文學者のたしなみを忘れて、ゴルキーにさんざん惡體をついてゐる、ゴルキーが勞農政府治下でやつてゐることは、破廉恥で、徹底的の墮落で、それも巧妙を極めた内部的な目にもとまらぬ墮落化だと言つてゐる、そしてその説明として擧げてゐる話が振つてゐる、「私は（露西亞にゐる時）心弱くも愚かにも、飢ゑに死ぬやうな思ひをした結果、ゴルキーに手紙を書いて救ひを求めた、するとゴルキーは使ひの者を寄こして赤衛軍の割當だけのパンをやると言つて來た、犬にものを呉れるやうに。……一片のパン、木の端くれ、ゴルキーはそれだけのものを飢ゑて凍えてゐる者にやればいいと思つてゐるのだ。」と。私は露國のブルジョアが米國へ逃げて行つて、米國のブルジョア雑誌に掲げた一文を讀んだことがある。その中にかういふ挿話がある。自分

は部屋の中にゐた、するとそこへ勞農政府のコンミッサールがやつて來て、二枚ある外套の一枚を強奪して行つた。彼等は強盜だ。だから彼等の支配に服されないと。これとメレヂュコフスキーの挿話と同類なものである。着る外套のない者が、又着る外套のない者へやる爲に、二枚ある者から一枚強奪するのが、どうして強盜であるのか、（露國の場合で見て）無産階級運動の歴史的經濟的意義に通じたものには、コンミッサールが二枚の外套の一枚を取り、大銀行を國家の手に收め、大工業を國有としたのは當然である。この怨言はブルジョアの傳統的私欲の言はせる怨言である以外何物でもない。ゴルキーがメレヂュコフスキーに泣き付かれて、赤衛軍比率のパンを與へたことは、ゴルキーとしては勞農規律の下に於ける、最大限度の親切である。メレヂュコフスキーの如きブルジョア・サルインに慣れた藝術家にとつては、勞農階級の前衛なる赤衛軍のパン比率では生活が出来ないのも尤もである。然し、ゴルキーの所謂「露國勞働階級の潜在的精力が表面に表はれ、資本制度の基礎を破壊し得る力を喚起しつつある露國革命の發展」の時に際し、ゴルキーには一ブルジョア文學者の食慾を満足させてやるだけの物好きを持ち合はせてゐないのである。メレヂュコフスキーから言へば、自分は赤軍の如き下等な人間ではない、赤軍のやうな下等なものは食はれない、ゴルキーが藝術家を尊重するならモットよきものを與へる可きだと云ふのであらう。特權階級に育つて、特權的觀念を城壁としてゐる一派の藝術家の、特權的脆弱が露骨に出てゐる。

メレヂュコフスキーに對する惡口の總括として、「ゴルキーはボルシェヴィキよりよいどころか一層悪い。レニンよりも惡く、トロツキーよりも悪い、レニンやトロツキーは、人間の肉體を殺すが、ゴルキーは人間の心靈を殺す。……莫斯科では人間を虱の入つた袋に詰め込むが、ゴルキーは露西亞の心靈を虱の袋に詰める。」と云つてゐる。肉體と心靈！どこまで行つてもそれだ！ブルジョアの偏見がどんなに人間を幾つにも切り刻んだか。そしてどんな無意

義な闘争が人間の中に無益に行はれたか。そしてゴルキーはいかに聲をからして、「全き人間」「人間らしい人間」と叫んだことか、まことに、レニンやトロツキーは、ブルジョア支配の下に於ける貧困と、飲酒と、疲勞のために、腐つた葡萄の如くなつた肉體を減さんとするものである。まことにゴルキーは、ブルジョアの麻醉の傳家の祕藥たる心靈を殺さんとするものである。而して彼等は相携へて、勞働を以て生活の第一義とする、スタウトなる、全き人間を以て是に代へんとするものである。かくて彼等は、無産階級の中にこの歴史的使命を果すものを發見したに外ならない。

メレヂュコフスキーはこの公開狀の末段において、人類の最大多數を占める無産階級をもつて、人間でないといふやうな無茶を言ひ出し、現に存在して歴史的進歩の戦ひに従事してゐるものまでも否定せんとするの狂態を暴露してゐる。藝術を以て生きた人間の上にあり、藝術家を以て人間以外の特權的人間とするブルジョア藝術家の論理の當然な歸結であるとは言へ、餘りにリアルに向ふ誠意の無いのに驚かざるを得ない。「彼等——ボルシェヴィキ、無産階級——は、人間でもなければ動物でもない、いや惡魔でもない。君の火星の住人（ウェルズの小説に出て来る怪物）に外ならない。……彼等は外界から來たものである。彼等の肉體は吾々の心靈ではない。彼等は吾々にとつて見知らぬ人である。非地上的形而上的怪奇に満ちた外界の住民である。……火星の住民の勝利は、私及び私の祖國だけでなく、全世界とその文明とを破壊するものである。」とかうだ。メレヂュコフスキーを以て代表される藝術家が、無産者の大衆とどんなに厚い壁で隔てられてゐるかが分る。彼等は新興階級に面と向つて、火星の住民に面したやうに度を失つてゐる。さうして見知らぬ人だと告白してゐる。彼等が見知らぬといふ事は、これまで存在しなかつたといふ事では決してない。

（大正十一年五月）

文藝運動と労働階級

一

ある會の席上で平澤計七氏は、プロレタリア藝術などと言つて見たところで、今のところ労働階級では、そんなものを讀む者は一人もない。結局知識階級の一部の讀みものに過ぎない。われわれは本當の労働階級の中へ入つて行く、即ち労働階級の日や耳の糧になる藝術をつくらなければならない、といふ意味のことを述べた。そこで平澤氏にしたがふと、今のところ労働階級の日や耳に直接訴ふるためには、労働階級集團地で天幕張りでもいいから、芝居をやる、新講談をやる、それがいいばんいさうである。實際また、平澤氏はそれをその通りに實行してゐる人であることは、誰でも知つてゐる。

平澤氏のその言葉には、だいたい誇張もあり、また芝居や新講談の段になると、少し茶氣を帯びて來るが、とにかく、今日プロレタリアの藝術といつても、その讀者はヨリ多く知識階級、乃至は、知識階級の一部と、餘り距りのない労働階級の一部に止めることは、平澤氏の言の通りである。これは今日のプロレタリア藝術家の名譽のために遺憾なことであるが、事實だから仕方がない。

理想を言つて見れば、知識階級といふブルジョアの讀むプロレタリア文學などでは仕方のないのは分り切つた話である。プロレタリアの讀むプロレタリア文學でなければ本當でない、事實また今日の

プロレタリア作家でも、自分の書いた小説を、女の腐つたやうなブルジョアの子弟が讀んでゐるのを傍見した時よりも、まだ勞働階級の人の力強い掌に開かれてゐるのを傍見した場合に、眞に嬉しさを感ずるにちがひ無い。しかし今日ではまだ、そんな場合は極めて尠いし、一二年の間にそれがどうにも成るものでないのは、正直に見てさうである。

二

しかしそれは讀者——讀まる範圍から見ての話であつて、且つまた今日のところといふ條件からの話であつて、それだからプロレタリア文學などと言つたところで、駄目なものだとは言はれない。華族の坊ちやんが閑つぷしに長椅子にねそべつて讀まうが、斷髮の飛び上り者が腹匍ひになつて讀まうが、そんなことで、プロレタリア文學の新興藝術としての價值が、毛筋一本ほども傷つけられはしないとは言ふまでもない。

主觀的にプロレタリア作家、批評家から見ると、ブルジョアの油鯉の鳴くやうな藝術ではたまらない。支配階級の應接間の飾物のやうな作品では仕方がない。搾取階級の御用藝術では駄目だ。そんなものは叩きつぶしてしまひ、俺達は俺達自身の言葉を所有しなければならぬ。俺達は俺達自身の生活を創らなければならぬ。そのことによつてブルジョア文學を徹底的に仆さなければならぬ。そのことによつてブルジョア文學を徹底的に仆さなければならぬとの火のやうな要求から出たのが、プロレタリアの藝術運動なのであるから、そこに客觀的な何者によつても傷つけられぬ現實的意義の存するのは、到底拒むことが出来ない。そして今日の場合では、讀者といふ角度からするよりも、唱導者の主觀といふ角度からする方がプロレタリア文學勃興の意義に接する道であることは、これもまた拒むことが出来ない。

理想を言へば切りはないが、知識階級に讀まれるプロレタリアの文學でもいいから、とにかく勞働階級がそれ自身の表現を持つ運動

を開始したといふところに、劃時代的な意義が存する。母親にしか分らない言葉でもよろしい、とにかく赤ん坊の言葉が赤ん坊自身の口から發されたといふことは、赤ん坊の生長の上に、必然の大飛躍であらねばならない。その言葉が大人にしか解らないからと言つて、赤ん坊の最初の言葉の價值は少しも傷つけられはしない。

三

だが、勞働階級に讀まれぬといふ事實は、何としても遺憾なことで、プロレタリア作家の張合ひが、大にそのために殺がれることは事實である。勿論、早く世に認められたいとか、一日も早く一かどの作家の列に加はり度いとか、世に所謂文士として大手を振つて通り度いと言つた、不純な願望を抱いた裏切り者は別として、本當に勞働階級の表現上の解放に盡したい、勞働階級の運動の一積極力となり度いと願ふ作家にとつては、製作上の張合ひが大にぬけるのは、想像するに難くない。

知識階級——ブルジョアに讀ませる小説なら、ブルジョアが書けば澤山だ。せいぜいのところで、所謂社會文學式のもので事が足りる。啓蒙なら、呪詛なら、それの方が却つて有効でさへある場合がある。プロレタリア藝術は、プロレタリア階級の集會的發言であり度い。その意味でプロレタリア階級の讀む、讀んで積極的建設の進行に役立つものであり度い。さう願望するのが本當であるから、勞働階級に讀まれぬといふことは、「今のところでは」にしたところ、とにかく遺憾千萬である。プロレタリアの藝術運動が、進行するに随つて、一日も早く勞働階級に入るやうにせねばならぬ。入り得るやうにならねばならぬ。

或る人は抗議するであらう。今の程度のプロレタリア藝術でも、勞働階級の一部には入つてゐる。何も知識階級——ブルジョアばかりが相手ではない。勿論、曲りなりにも作家さへ出すまでに發育した勞働階級であるから、それを讀み味へる一部のあるのは、分り

切つた話である。僕の言ふのはさうではない。社會主義運動が労働階級の中へ入らないと言つたつて、労働階級の如何なる部分も社會主義を解せぬと言ふのではない。社會主義が労働階級の中へ入つて行つてゐるといふ場合は、量においても、深さにおいても、社會主義が労働階級の各層に入つて、その動向を左右し得てゐるといふ場合である。それと同じに、プロレタリア文學が労働階級に讀まれる、入つてゐるといふ場合は、量においても、深さにおいても、労働階級の各層に入つて、その情意の解放表現に役立つてゐる場合である。その意味で、平澤氏の言よりモット衝込んだ意味で、今日のプロレタリア文學が、労働階級に讀まれてゐない、一日も早く讀まれるやうにせねばならぬと言つたつて、無理はない筈である。

四

最近革命ロシアから歸つた人の話によると、プロレット・カルトの盛んな、あらゆるものを占有してゐるロシアの労働階級でも、今日ではまだ、所謂労働階級の新作家の書いた小説や戯曲などは喜ばず、昔は容易に手に入らなかつた名ある小説を讀みたがつたり、名ある俳優の日本ですれば助六とか勧進帳とかいつたものを見たがつてゐるとのことだ。それがまた本當であらう。革命ロシアでさへさうであるから、大衆は味へる力も買ふ金もなく、前衛は第一段階の仕事のために水火の苦を嘗めてゐる日本の労働階級では、プロレタリアの文學が労働階級に入るなどは、思ひもよらない。プロレタリア文學者は、その遺憾は當分遺憾としてつておいて、文藝の分野からブルジョア支配をぶち破ることを工夫すればよい。さういふ人があるかも知れない。その議論も十分に成り立つ。無理のないところこれが正直でさへある。

その議論が成り立つ代りに、プロレタリアの文學と、労働階級乃至は労働階級の實際運動の距離とが、だいぶ遠くなりさうな氣がする。プロレタリア文學運動なんて役にたつものか、労働階級的全階

級的な闘争の戦場では、寧ろ邪魔つた。さういふ荒い言葉を、われわれはよく實際運動家の側から聞くが、この大づかみな言葉が、ここに来ると本當になりさうな氣がする。困つたものである。

ここで一寸、謂ゆる労働文學者ゴルキーをやつつけたカール・ラデックの言葉を拜借する。

「ゴルキーには何故かう、ロシアの農民と労働者の進行の一切が、分らないのか！……彼は彼の最良の小説の對象を成してゐるルンペン・プロレタリア的分子の間に生活してゐたが、……半夜、惨めな屋根裏の蠟燭の光で、天文學必携書や、ダーインやリーベルドの文明史に讀み耽つたのち、やうやく獲た僅かばかりの知識を、世界中の何ものよりも上に置いて……教養ある俗物精神に捉はれてしまつた。……彼は全然ロシアの産業労働者の環境に根を置いてゐない。彼の描く労働者は、——たまたに産業労働者を描けば——もやもやした民衆の上に巨人のやうに身をもたげてゐる、精神主義的インテリゲンチアになつた労働者だ。……」

今日の日本の謂ゆるプロレタリア文學者が、うつかりすると、どうやらラデックからかう言つてやつつけられさうな氣がして仕方がない。實際運動家と藝術家との差だと言つてしまへばそれまでだが、プロレタリアの藝術運動が、それではあまり根がなさ過ぎることになる。

五

そこで結局、それだけは言へる。日本のプロレタリア文學者は、知識階級の讀むプロレタリアの藝術を書くといふ、變てこな過渡的現象は氣にかけないで、精進する。その精進とは、永遠の價值とか藝術的價值とかいつたブルジョアが半世紀も一世紀も前に言つた寢言に目もくれず、今日の日本の労働階級の生きた言葉でずんずんつき詰めたプロレタリアの藝術を創造して行く。そして労働者の群から出たなどといふ事實を唯一の強味とはしないで、労働階級的全階

級的進行に沿つて、獨り手にその藝術が階級内部の支持の上に立つやうに心掛けることだ。それがこの際執る可き道だ。

生田長江氏に依ると、(讀賣)「プロレタリア作家に對する私共の不満は殆んど悉く……思想上の立脚地に對する不満」で、「特に現代の資本主義經濟的組織によつて虐壓汚毒されてゐるのが、單に無産階級計りであると考へ、又感じてゐる社會觀の不徹底さは、どれだけ彼等の作品を興行きのない、深味の無いものにしてゐるかわらない」さうである。そんな馬鹿な話はない。今日の日本のプロレタリア作家で、今の世に虐壓汚毒されてゐる者は無産階級ばかりで、例へば中産階級は愛撫尊重されてゐるなどと考へてゐる者は半人もない。このひがんだ言葉は僕が代表して生田氏に返上する。ただ日本の今日のプロレタリア作家が虐壓汚毒されてゐるものの中で、未來の世界を創るものはプロレタリア階級だけで、その意味で今日積極的な創造の道をとる得るものはプロレタリア階級だけだと、どれだけハッキリ解つてゐるかどうか、それが問題になり得るだけである。

ところで生田氏にすぐさま返上の出来ない言葉が、その先にある。生田氏によるとかうだ。「自分一人が偶然にでも、ブルジョアらしいものになり得たならば、それつきり『問題』が消えてしまひさうに思へる。小さなプロレタリア的羨望嫉妬、小さなプロレタリア的怨恨憎惡を無批判に肯し云々」この言葉が、そつくり當てはまるプロレタリア作家は、日本の隅々を搜したつてあるまいが、この言葉がある程度まで胸にこたへるプロレタリア作家はありさうである。全階級的進行に沿へとの僕のこの一文は、その不安が先づうごいて出來上つたものである。

(大正十二年一月)

藝術の革命と革命の藝術

一

プロレタリアの藝術運動もだいたい進行して來た。相當の有力なプロレタリアの作家、批評家も現れた。もはやプロレタリアの藝術は動かす可からざる事實である。如何にブルジョア批評家の斜視亂視をもつてしても、この事實を拒むことは出来ない。

そこで私は、プロレタリアの藝術運動が進行すればするほどその墮落、その迷行を憂ふる一人である。私は人類社會の進行を信じ、そのために小さな自分の力を捧げ度いと念ずる點では、飽までもオプティミストである。しかし人類社會の或時期をとり、或人間の群をとつて、その動きを見る場合には、私はベシミストの態度を棄てない。人はこれをもつて、ブルジョアの習癖の疑ひ深い態度と見るかも知れない。それは間違ひである。無産階級運動が、單なる群衆運動でなく、全階級的組織運動である限り、その立場に立つわれは常に一方においてオプティミストであると同時に、他方に於てベシミストの準備を缺いてはならぬ。由來、無産階級の戦士の徹底的なりアリズムは、このオプティミストとしての要素と、ベシミストの準備との渾然として融合した所から生れたものである。それあつて始めて、信ずることを知ると同時に、戦ふことを知るのである。

私がいまプロレタリア藝術家に向つて、何等かの叱責を加へたに

しても、それをもつて幼きものゝ成長を妨げることとしてはいけない。生長を信することなくして、眞の叱責は加へられぬ。正しく伸び行くものを凝視することなくして、墮落、迷行を指すことは出来ぬ。無産階級の藝術の未來を信することにおいて、私は人後に落ちるものではない。今日のプロレタリア藝術運動の本統の進行を凝視し、そのために微力を致さんと念ずることにおいて、私はたゞ足らぬことをこれ懼れてゐる。たゞ私は、未來を暗くする墮落、本統のものゝ進行を傷ける迷行に向つては、何者の名を以つてしても、黙して居ることは出来ぬ。

二

藝術は、言ふまでもなく、個人の所産である。個人の性情や直接の経験が、そこに個人の數だけの色彩を造り出すことは、勿論である。プロレタリアの藝術と言つても、藝術家各人の先驗後驗の準備によつて、そこに幾多のバライティの生ず可きは勿論である。特にプロレタリアの藝術運動は、一イズムの運動でなく、一階級としての運動であるから、猶更さうである。プロレタリアの藝術の執る可き形態が、かくかくであらねばならぬと云ふが如きは、プロレタリアの藝術運動のひろがり目に目的と云ふかぬ者の言である。

そこにはバライティがある可きである。それでなくては、健全な藝術の發達ではない。しかしまた一方に、プロレタリアの藝術として、動かす可からざる共通なる要素がなければならぬ。この共通なる要素こそ、プロレタリア藝術が、階級藝術運動として、革命藝術の意義を發揮するものである。

これを廣く労働階級にとつて見てもさうである。各労働人は各々その生活を個々の色彩をもつて營んでゐる。しかし労働階級が一個の革命的階級である所以は、各労働人に共通意識があり、それが生長の可能を持つ點にある。この意識なき労働人は形は労働人であつても、それが如何に貧苦の洗禮を受けてゐたとしても、いまだブル

ジョアジの隸屬動物と選ぶ所なきものである。

然らば、プロレタリア階級の共通意識、プロレタリア文藝の有つ可き共通要素は何であるか？ その第一に來るものは、言ふまでもなく革命的精神である。

貧しきもの、踏みにじられたもの、飢ゑたるものを描いた藝術は、今日まであり餘るほどある。特に自然主義運動以後の文學には、労働人や農人を描いたものは、枚舉に遑がない。しかし、労働者や百姓を描いたからと言つて、プロレタリアの文學と言ふことは出来ない。それは何故であるか？ 作者が封建的な憐みとか、ブルジョア的な理解とか言つた眼で眺め、描いてゐるからである。作者にプロレタリア階級の革命的精神といふ共通意識乃至要求がないからである。

作者が過去の或る時期において、労働の生活を送つたからとて、それを唯一の資格としてプロレタリアの作家とすることは出来ない。今日ブルジョア藝術を得意になつて書いてゐる連中にも、過去において勞役にしがたがつたものが相當にある。暗い炭坑からはひ出た男もある。過去において労働生活をしたといふ経験が、プロレタリア作者たる資格の最後のものでない所以である。もちろん過去の労働生活は高價である。しかし、それにも増して高價なる可きは、それによつて、労働階級の革命的意識に到達した経験である。私は眼前に、労働生活からぬけ出した作家でありながら、沈潜した革命的意識を全く有せざるもの、それが次第に薄れて行くものを見るのは、遺憾に堪へぬのである。それが、それらが革命の藝術の名を冒すことによつて、いかにプロレタリア藝術運動の鋭角が、次第に鈍角化しつつかあるかを見るのである。

誤解してはいけない。革命的精神と云つても、ヒステリカルな絶叫や、がむしやらの猪突を指すのではない。感傷的な呪咀や、末梢神經的な破壊欲を指すのではない。さういふものによつて、「革命」

の快感を味うてゐるが如きは、最も非革命的である。習俗的な意味での、革命詩人ならそれでも結構であらう。しかしプロレタリアの藝術家の共通意識として有つ可き革命的精神は、そんな皮相な欲求ではないのである。

これをまた、かのブルジョア作家らが、刺身のツマとして喜び反逆的精神など同一視してはならない。ブルジョア作者の動搖層は、退屈した心境の換氣法として、反逆的精神の辛味を喜びこれをもつて革命的な意義と連絡させようとする。それは全然異なる二つのものである。プロレタリア作者の共通意識としての革命的精神は、無産階級の歴史的進歩と共に生長した階級意識である。藝術家がプロレタリアによつて革命されるのは、この歴史的必然力がある爲めである。プロレタリア藝術家が革命の藝術たる所以は、この共通意識によつて支持せらるゝが故である。——この場合附言しておきたいは、未來派、表現派の如きを、藝術革命の前驅として、われ／＼はその貢獻を認めるけれど、革命の藝術としてのプロレタリアの藝術は、それらに缺くる強固なる階級意識を有たねばならぬ。

三

プロレタリアの階級意識は、いかなる意味においても、ブルジョアの個人主義を容るゝものではない。ブルジョアの個人主義と對立させて考へれば、それは正しく非個人主義の精神によつて、照らされるのである。人はよく社會主義と個人主義との關係に苦勞し、社會主義の世になつたら、個人は没却されはしないかなどゝの懸念から、大いに立論に努めてゐるが、その場合に指示された個人の内容が、ブルジョア個人主義の尊重する意味のもでなければ、かゝる「個人」は無産階級の支配、階級社會消滅の未來においては、當然死滅すべきである。それは太陽を指すよりも明白である。個人主義的精神は近代ブルジョア社會が完全させた唯一の道德原理である。そして觀念上の所産が常にさうであるが如くに、この歴史的

精神は、遂に永遠の座を冒し、超時代的な謂ゆる永遠の理想に祭り上げられたものである。ブルジョア教養の一切の道は、こと／＼これに續き、ブルジョア支配はその名によつて、永遠の幻覺を起させようとしたのである。しかしその下から、革命的なプロレタリアの意識が生長し、新内容を有つた氣持が、必然の進歩を以つて擴がつて來たのである。

それは決してブルジョア個人主義の心境ではない。全く別な意識である。私はいつかこれをコムレードの心持と呼んだが、とにかく個人主義の精神とは、全く異つた心持である。その革命的な傾向の生長が、無産階級の革命的生長とも言へるのである。宗教的な傾向のある人々は、よく好んで、階級闘争を否定する理由として、無産階級は未來を支配すると稱しながら、やはりブルジョアの闘争精神を以つて満たされてゐる。だから無産階級の支配の世もやはり醜い功利精神の世であらう、と説く。かゝる言説の間違つてゐる事は、無産階級の階級的新意識の生成を見るに及んで、直ちに明白になるのである。

われ／＼はプロレタリアの文化の生長を信ずる。而して、われわれをしてプロレタリアの文化を約束させるものは、實に、ブルジョア文化の根本源泉たる個人主義的精神と正反對的な非個人主義的精神であらねばならぬ。そしてまたわれ／＼をして、プロレタリアの藝術を約束させるものは、無産階級のこの共通の新意識でなければならぬ。

これを同じく非個人主義的な、宗教的な氣持のあるものと混同してはならない。宗教的なその氣持は、個人主義的重荷に堪へられなくなつた正直者の、寄り合ひ助け合ふ消極的な避難民の氣持である。それは非個人主義的ではあるであらう。しかし積極的の意識の結成ではないのである。世界を支配す可き必然なる約束を有つ意識ではない。それは非個人主義的に轉化はしてゐるが、個人主義的精神の蹴返しを常に受けとめてゐる氣持である。プロレタリアの共通